



扶桑皇統記圖會
前編
六

43
2472
6



へ 2472 6



仲六呂の針らひす。奈良丸古六呂東人以下一族までも死刑執行の其身の舎兄
 豊成卿をも奈良丸の隠謀を知らざる疾奏せざる成罪として坵紫(流刑
 小ど定めたる 妻ハ前 是ハ依て横領家の周障大方あまも北堂の敷たふく
 就中姫の悲歎譬る小物なく俱ハ配所へ召連更と鉄小とがて泣き
 の大臣種ハ小偷ハ宥め流人の身となりてハ妻子と携(行吏叶など)ハ千一
 且勅勘を蒙り流罪小行ハるとも世身ハ犯せる罪無多れを程なく勅免と
 得て帰浴を蒙り夫と母と俱ハ須臾の憂を忍て待ハと練りのむ姫も為
 を癒なく只涙ふれて泣伏を痛め豊成卿ハ國岡將監父子ハ跡の更と
 何是と命ハ置妻子及び一門の人々ハ別を告追之の官人ハ急され怪ハ乃
 張典ハ乘られて愁然として配所へ赴く照日前も夫の流刑を悲し別と
 惜とも小従ハ行ハる思ハれども是も大臣ハ制ハ止られ力なく鐘ハ残り

三十一回 會行 第五下

七五ノ

通リ其當座と別乃新たふ行ま姫の妻と忘るるがかりし小月日乃
 主す又も継子と悪む悪念再發一良人の飯洛を内小姫を追失らんのと
 召使老女と心を合し其便を窺ひ多れども豊成卿齋居の通守中八國岡將監
 夫婦親子交る姫の丙舎小昼夜相結万更小氣と賦り些も忘りたく獲
 傳れ多由へ継母も手と下得た其中小二年まで將監が妻病小深て死し姫は
 十四才小なり又年惠見押勝君忽ち君竈とら削道鏡小奪れ憤怒不堪
 子殺逆を企て其軍利かく遂小江州高嶋おて洛命一高野上皇新帝を
 廢して重祚しのみ稱徳押勝が後奏す罪なれ古大臣成を流刑小行ひのみ
 一然御後悔あり勅勘と免して都へ召取しのみこれを豊成卿大小喜悅ありて
 愁眉と開れ飯洛して糸内一天皇と謝しなきて芽出度館へ歸られ多る北堂
 乃怡び目くたれ姫小種生一人の如く思ひ持衣の袖小とり付て嬉し泣ふどあれ

のどど理りわり多る豊成卿ハ姫及び北堂國岡將監父子其余の家族小の
 芽出度對面ありて其無妻を悦むを憂るる更も今昔語となり門の
 人々よりも飯洛を祝して贈る聘物の使者門前小市となり日乃来客絶間
 なく卿食應酒宴亦續たれ館の賑い諸人の耳目と致し殊更官位も日
 乃右大臣小任せられ家の繁昌昔より六劫増多斯く霜移り星換りて姫を
 十五才小かり天性の玉貌倍艶麗く吾朝の衣通姫漢家の李夫人とよも此
 姫小及すと見る人眼を奪はるるはかく槐門高家の息男達婚姻を乞望
 る方妻これども又の大臣ハ女御宮妃小も備人と兼て思われ多きを敢て婚議と承
 引れざりたる然る小称徳天皇先年桃杏の御宴の節右大臣の幼女が琴と彈
 る衆女小優し更を思召出させし即ち右大臣小紹して姫と宮中へ徴せし乃
 琴を彈させり聽せり先年より又十倍と其礼音清く妙小て容貌す世

小頼なく真小絶世の美人を。春感法うも。三位小叙。中將の御と名付の
 數々の御被物を給り。姫も右大臣も大不怡ひ厚く天恩を拜謝し。退
 出。いと帰鐘せれる。是より世の人中將姫と稱し。多かり。経母照日
 前も。今度中將姫が官位を授る。世も各譽と奉。成見聞おつけ。先年の耻
 辱と思出。愈如憎。我と瞋毒の焰。心と燦。何卒大臣小忌疎ません。日
 腹中の老女と商議して。個の奸針を投げ。一日豊成卿小向の祥と愁る。面色
 と涙と含。抑中將姫の御使。小妻君小見。おのせ。始より誓と立て。預り。まを
 所生の子と思。陰陽なく。大切傳育成長。お女御皇后も。備んと指。折
 日と算。出せ。二期を待を。登。い。豈とく。ん頃日内外の人。より。姫の身の思
 死。廻哥と。胸塞り。い。い。い。不正行条。ある。と。中捨て。今夜。お脚
 耳。入。も。ぎ。り。小。其風貌。い。よく。隠。か。姫の不正。密。吏。を。侍。女。下。婢。の。中。小。見。留

一者も。少。も。も。も。も。密。小。小。小。毎。夜。小。姫。の。丙。舎。又。心。小。通。者。あり。て。一。時
 小。鳥。帽子。直。垂。を。著。さ。一。時。下。郎。の。姿。小。え。女。の。体。小。身。を。終。装。せ。時。待。る
 小。能。く。窺。へ。む。絨。年。若。法。師。たり。と。せ。す。如此。小。浅。猿。丸。淫。行。を。去。り。も。な
 と。敷。か。中。知。ら。ず。も。今。小。妻。心。一。つ。中。隠。が。く。此。吏。世。小。廣。く。知。い。む。御。籠。の。理
 瑾。と。た。り。殊。小。姫。の。身。の。為。も。思。う。や。い。む。為。と。小。告。な。り。も。な。り。と
 驚。舌。と。翻。して。も。実。や。小。鏡。言。一。れ。も。大臣。小。敢。て。信。せ。れ。ど。無。姓。氏。者。の。中。吏
 小。小。虚。脱。多。れ。も。の。や。争。う。我。姫。小。さ。る。姫。も。更。の。有。り。女。童。の。中。吏。と。必。と。も。場
 ら。れ。と。と。更。小。耳。あ。り。け。れ。れ。照。日。前。小。案。小。相。違。して。本。意。お。げ。小。其。夜。は。止
 々。小。鏡。言。の。用。ひ。ら。れ。も。憂。ひ。向。彼。老。女。と。密。小。招。れ。女。御。を。尽。と。殿。姫。の。吏。を
 悪。小。小。言。ね。れ。ど。殿。も。只。姫。の。愛。小。溺。れ。信。と。む。と。此。上。小。如何。と。お。れ。と。向。老。女
 微笑。小。小。憂。ひ。も。吾。身。針。と。首。あ。り。只。我。小。小。任。せ。り。と。退。り。己。が。相。識。も。八

内と呼下郎の小兵小賢丸者を密招先金銀を以て其心を懐け借言を
 申ハ其方如此くお扮當家の姫の両舎の庭樹の蔭小隠まで曉頂小御
 てま出い。是此館の北堂の御頼り。首尾より更を仕逐ふ。北方より
 賞金と給る。一として謀を云言を。慾小同のあた下郎のあつ。一應の慮
 りも及む。承伏し。老女悦び。照日前小耳結て。如此く小針らの殿小
 多り。小中言ふ。照日前大悦び。其夜大臣小向ひ。今夜も姫の密夫
 姫の両舎。忍び来り。由んま。者妻小告り。も頭露小姫の両舎を捨
 姫意小耻く。身と過ち。只密小物蔭小忍び。ひて。人の謳歌の偽
 成見の。誠け。大臣の猶信。が。思れ。北堂の度。の。言。少
 一。疑念を生。予実否を。試。ん。姫の居間の物蔭小隠。息
 と。結て。窺。果。と。曉頂小姫の両舎より。怪。男烏帽子。直垂。も。不

とれる。人。有。も。不知。白。踏。と。帰。リ。言。も。度。重。れ。人。是。と。信。す
 あ。い。昔。曹。子。と。り。者。闘。争。小。及。び。人。を。殺。す。然。小。孔子。の。門。人。曾。子。の。母。布。と
 織。て。居。る。小。或。人。戯。れ。小。曾。子。人。を。殺。す。と。告。れ。も。曾。子。の。母。信。せ。と。忠。孝。厚。た
 我。子。何。と。人。を。殺。す。と。と。尚。自。若。と。機。を。織。り。然。小。又。一。人。曾。子。人。を。殺。す。と
 呼。り。て。門。外。を。過。是。小。依。て。曾。子。が。母。半。疑。ひ。半。信。ど。い。ま。心。決。せ。る。小。再。三。人
 曾。子。人。を。殺。せ。り。と。呼。り。て。門。を。走。る。小。母。も。今。信。と。思。ひ。布。と。織。捨。て。支。行。り
 街。乃。人。小。曾。子。維。を。殺。せ。り。と。問。小。否。你。が。子。の。曾。子。あ。ら。う。人。を。殺。せ。り。小。惡。少。年。の。曹
 子。わ。り。と。言。ひ。母。安。心。と。帰。り。と。曾。子。の。賢。か。と。知。り。其。母。之。言。三。度。小。及。び
 偽。言。と。信。む。る。更。尚。是。の。如。し。小。豊。成。卿。も。北。堂。が。度。の。讒。言。小。稍。疑。念。生。じ。る
 上。今。此。衆。夫。乃。忍。で。帰。り。然。ん。奸。計。わ。り。と。心。付。む。諸。人。の。妬。哥。も。偽。あ。ら。う。と
 思。ひ。一。度。ハ。怒。り。一。度。ハ。怒。り。照。目。前。小。向。ひ。怒。の。涙。を。含。む。你。が。是。を。告。り。む。と。い。ふ

狐疑して信ぜざるが今暁小至て姫の衣夫を見通し。我姫が於てはる汚る行
 冬よとをりと思はるる小君が見前も面目なり。年来天子の女御皇妃の備
 んと思ひ望も水の泡と消阿比僧法師小身を汚せ其身一人の耻辱なり。父
 母の面不泥土と塗家名と汚一門縁体小君で面目を失はむる不義者天聴小
 達しか御替の程も量れど是迄婚姻を望一人も何の面目有て顔と合す
 ぬん。噫豊成何かれ人の舎弟ハ朝敵逆臣の汚名と称られ死の耻を肆一人
 の女も不義姪奔の貞名と呼まう家系と汚をどや先祖への恐七生す勤當
 とを。你的針らひも何方なりも追拂ひと憤怒の浪湯玉の送る。以の外
 小怒れぬ。照日前仕は後と心中小悦ひあつ。祥と押省り。御怒ハ埋り、心ど
 も若死時ハ過ちも有あひおてさう。先脚憤りて鎮めひさ妻小任り。妻が二
 門の方へ預けかれ。よく練歩愉して姫の行ひを整させい。と義理をがま。練

くれ大臣ハ怒と氣い。鎮まされ。流石思愛の姫も。只今追放よと。言
 ら。小君ハ預け。左も右も針らひ。豊成ハ二度耻辱か。と。北
 堂小君任され。豊成當羊称徳天皇の勅詔。諸卿を交代。諸國遣さ
 且國司守護職の政事の可否。檢め國民の風俗と正させ。ひさる。十月ハ右大
 臣豊成卿播磨國を巡見の役。當られ。豊成國源吾舎弟六郎兄弟二人。門
 連其餘の從者と率て十月下旬。發足あり。國岡將監も大和の國見。御見送
 の為。小君ハ從ひ行。照日前。是を願ふ所の時節。よと。兼て老女。小君
 置。松井嘉兵太と。強勇の野武士。晴招。寄。照日前。對面して。され
 々。當館の姫。兼て親王家の宮妃。小備。を。詔あり。小君ハ。者。と。姫。行
 ひ有。天聴の恐。憚り。討て。捨。良。豊成卿の。命。下。され。小君。妻。が。為。小
 君。送。子。ひ。れ。館。の内。お。斬。せん。も。送。子。を。惡。て。の。所。為。と。世。の。人。の。口。の。端。ふ。ら。ん。

うろろ。你何國かるとも連行人まれば殺害し先骸と隠し首ごうと持て
素見せよ此更世上へ洩せんと當館の瑕瑾を堅く他へ漏れさせ勿き首尾
よく更と為遂ふを願て武士お抗し過ふの采地を得さるべし。是は當座乃
賞金として一封の砂金と云ふれども強慾の嘉兵太大い悦び儀少も及ぶ領
掌し。此の今夜御迎お参り明日討まひし御首と持参仕るを約定し
別を告て己が栖居へ入ると一乗の轎を用意。己が配下の溢者お昇せて其夜
横佩殿の館と望んで地行々々

松井嘉兵太五國五謀義

将監苦忠助中将姫

再統横佩の北堂照日前毒針を嘉兵太命と後中將姫と招寄て言れ
何ある者の總言やせよ。御父君你を殊の外憎むの一手討せんと仰せ
種くお練り宿りませう。此館に在てはな何ある災難の出来まるとも針を

依て妻が門の交你を預け時く小殿の御憤り成宿脚心おおむ迎へよう
これ追は彼方かて心長閑暮り。又もあれ你を落せまて内くの者おあせ
の身のとも耳くも。まが里方の者の迎お来るまで。まが丙舎お忍びく在せよ
詞を和めて購れむ。姫は是継母の深丸巧なりと早く推察ありぬ。其色をも
んせ。只よめお討せると長者やよめおど。継母悦び我丙舎へ連入り
嘉兵太の来る候今や遅し待も。其日も暮初更の頃ひ嘉兵太轎を昇せ
小門より潜り入来りぬ。照日前大い悦び中將姫と伴ひ出て轎に乗し疾くと
疾くと急ぐも。嘉兵太心得て配下の者お昇揚させ北堂小別を告て小門を
出。越ぐと馳せせて草鼻峠の山中到り。轎を昇下させて配下の賊お捕え
諸姫と轎より曳出して。今夜此所まで伴ひよせし。脚又右大臣殿の命せよ
脚首と討せよとの脚更なり。敢て我をお恨めひと。今ハ佛名と称未成佛と

願ひの勸められぬ。姫の館を出しより、只曼路を誘ふ心地。轎の中平伏して泣き居る。此時より涙を抑へて嘉兵太に向ひよも教へらるる。吾身は君乃仰せ度も背く事なす。増て一点の罪を犯せ、更かぬ。又君の命と自ら入らる。皆是経母公吾身と憎み、この脚針ひかり。是も前世より定めし宿業あるを。経母公と恨むを。さて何れ恨ん。只片時も早く自己の首を斬り、経母公おんせまの毒脚心と慰めよ。斬らん。後か首の見苦しくぬ。よく洗ひ浄め。此上の衣も褻と持行ひ、中着の衣は、你小くを。下着も重き死に嚴と褻と深谷廻埋と。但自己実の母公の御菩提の。年々毎日脚経を六巻で續き、今日更の證たぬ。一巻も續む。未煉の似れども。脚経を續終るまで、劔と下と更勿れ。脚経を續終り、掌と合て、脚佛の御名と稱を相図りて首を斬てよ。此所にて西へ何方と。回る。嘉兵太指し、西へ彼方なりと。

指教する方、向ひの稱續浄土経を讀誦ある内、嘉兵太も明晃々たる太刀を抜て頭小柄し、折し、十月廿日の月影物凄然。脚後不実立て、續経の終る外、親ひ待々。可憐中将姫の玉の緒、風の前の灯より、戸見待間の露よりも、暮途斯く。姫ハ浄土経三巻まで、續誦あり。流石二七の稚心小、今斬ると思ひ、又心乱れ舌寒しく、残る三巻と續き、ひの嘉兵太を顧みて、今更は、更足ぬ。一巻を又母現當二世安樂の。二巻、先きの。一実の母公増進佛果の。今三巻、吾身現世の罪滅び亡母公と一蓮花生、成托ん。早首斬よと。再び西へ向ひ、堂と合て南無阿弥陀佛と十遍をう。待り。嘉兵太敢て刃を下さず。を。姫経りて背を顧み、小嘉兵太と投捨地上、坐して、免首居り。中将姫を、如何に疾斬て、隙より物思はる。情あり。早く斬てよと。嘉兵太漸し身と起し、面と上り、涙を潜せと流し、愚拙君の経文を讀誦し、今を疾

却道と浴りく青雲の網を求めんと思ひひくは往春を續編し多御声塵く妙
 小して鬼畜小比丸已か耳と刺車が如く増や鬼くは継母公と恨むと御文と小
 二世安樂とのさす清く御心底玉金も換り上従ひとあり花より艶麗なる玉
 の御肌太刀と當りつる所もいづれ御年もいづれ推く在ると小御孝心深く死小臨
 のひても御心を乱しおの御健氣を成見も此年月悪吏との業とせし身の罪
 科未来の苦患も忍く送ひの夢も忽ち覚職悔の心只今生ひ此上御命を
 助けも左も右も計ひのせむ。後目小露頭如何なる罪科小行れれと
 も數多ぬ一命惜む足むつろ考ひを慾心の為小君を討も恩賞知行と
 得るとても不義の富めを浮る雲小比。将幸ゆて免るると我齡百才まで
 よも保ちひや。や愚拙が弟屋御供仕り山妻と高議り。御身隠し
 せんと甲斐く身げらみ。て姫の塵おもひ背負る。中將姫御脱科も

らど是御佛の御如渡る。路とが口の中て御経をど續編しひる斯
 く嘉兵太八足を逸々我拙を歸り。姫と下りまらせ食物めど勸め借妻多
 者小有一五と結り皮せぬ妻は度一度ハ後れ一度ハ始ハ実も悪心を
 翻して助けませり。おのれは継母御墓を何と返答去り。と問小嘉兵
 太答て其儀ハ路上案。置ると姫の上衣とを猪己が股を刺し其血泣を衣
 小く此衣を持て館行姫君を討より。とて御墓を欺ん你ハ姫君御
 介抱や。入来る者の見答さる。一室小深く忍むせされ。と命。早夜も明。此
 横佩の館と志しと走り。嘉兵太路上思ひ。ハ女性ハ疑念深れ。とつり
 此衣の。持参するも。首ハ何也持参せると問。返答ハ徳む。彼館
 の長臣國岡將監殿ハ忠直の武士なりと緒人賞美とん。不如國岡小對面。細
 を語り其智と借んハ心定り。將監が邸名。案内。と。幸國岡



草香山浪金平
 全將姫斬
 姫文讀誦
 聞て忽地悪心持
 下御命助

皇紀言區會前卷五

三十一

昨日王君と面責す。見送り。前夜帰宅と在宿。何人かと呼入て對面
 する。見知り。男か。振りあ。其妻。子細を。同々。嘉兵太。声。低て
 自己。奈良。坂の。辺。松井。嘉兵太。呼。浪士。當館の。御堂。我。召れ
 中將。姐の。御。親。王家。御。典。有。定。身。賤。者。不。義。の。行。ひ。あ。れ
 天。聽。の。恐。い。俾。有。依。討。捨。右。大。臣。殿。の。嚴。命。下。ま。す。你。何。方。へ。連
 行。殺。害。首。持。参。せ。と。愈。い。由。領。掌。と。前。夜。姐。君。と。伴。ひ。出。て。い。ま
 より。姐。君。の。御。心。底。を。窺。ひ。ま。れ。御。身。も。御。過。ち。全。く。継。母。公。姐。君。と。惡
 と。ひ。て。の。義。と。推。察。し。姐。君。の。御。命。を。助。け。御。上。衣。と。す。我。股。を。刺。其。血。を
 上。衣。に。た。だ。如。此。針。ひ。て。い。い。も。此。夜。の。中。に。御。臺。疑。ひ。首。如何。と。同。か。ん
 返。谷。の。い。方。依。て。推。察。さ。御。對。面。願。ひ。貴。所。の。御。智。慮。借。度
 所。存。い。と。血。泣。の。衣。取。出。て。見。せ。れ。特。監。以。外。不。發。た。や。さ。く。如。く。姐。君。を

聊も御過ち在さ。親王家の御縁終の義ハ跡形も多。虚誕なり。比。以。て。継
 母の奸計。我も主君を見送。のため。他。出。て。其。更。と。敢。て。知。ざ。り。我。妻。ハ。姐。君。の
 乳人を勤。め。れ。姐。君。の。御。更。ハ。少。の。義。も。我。告。げ。不。妻。ハ。去。り。年。九。去。り。其。後
 ハ。敢。て。乳。人。も。無。く。争。う。の。大。更。も。出。来。せ。り。你。が。姐。君。を。助。け。も。小。あ。ら。ん
 御。苗。守。と。預。る。我。後。日。主。君。何。と。言。上。せ。れ。滅。小。御。辺。ハ。姐。君。の。御。命。乃。親
 我。為。小。弓。矢。神。なり。我。御。辺。を。持。て。継。母。小。面。談。し。其。罪。と。紅。さ。き。易。し。と。い。ふ
 主。君。の。御。苗。守。と。い。ひ。心。授。れ。女。性。陳。謝。の。ま。ま。不。慮。の。生。害。か。と。有。て。も
 是。ま。主。君。言。上。申。す。わ。く。姐。君。の。御。為。小。軍。と。い。ふ。は。な。と。此。夜。の。中。に。疑。念
 深。く。継。母。よ。も。信。ぜ。ず。何。卒。欺。く。我。方。使。も。手。と。拱。け。沈。吟。す。が
 心。ち。喘。と。膝。を。歩。滅。小。手。段。を。案。中。た。我。小。一。人。の。女。あり。小。秋。と。呼。ぶ
 當。年。十。五。才。を。れ。姐。君。と。同。支。た。う。面。貌。も。さ。ま。と。醜。く。と。集。と。御。身。代。小。首。を。斬

て其衣小けも今夜持参して冠母小見せられぬ夜中より年齢ひくく真乃
 姫君の御着おんと見違らる御と言われも嘉兵太點首如是ふか御臺を
 欺人妻の身ふいふ御愛女を御手小掛おん余小御痛くは義か別小
 御公別はいむと中々小將監首と揮否忠義のさ小命と捨るハ武士
 者の常あり女たりとも何と辞する妻おん皆時是小侍にて座とまき息女の
 私房へ往侍女を遠ざけ女小向ひ声を低て白館の北堂冠へ姫君を憎殿乃
 御田守と幸小嘉兵太より者小慥失ひまじせられ彼者情ある者小
 姫君の御命と助けなれり然れども討めさせ登小首と北堂小見せぬ猶疑ひて
 手と廻し姫君を害せざる妻治定かろる小依て我你を手小掛姫君の御身小
 せんと思へり男子ハ君小命と捧げと御大妻小及と死ハ君の御あふ死と潔くま
 ち臣下する者の常あり女らとも忠義ふるるハ有るを此理を弁へ姫君の御為小

命と又小得させよと統諭しなれ小秋夜て些も残る色なく仰せもわ姫の御命
 小代りも命ハハ望むとろふて更小命ハ惜むも疾く御手小掛玉くる命と長者
 一やく小言々るおど將監落涙しゆて中々るる流石我女なり死も後ハ君家の厚
 死御吊ひを受先主一母と俱小上品浄土往生一母子一蓮の墓小坐して限あれ歎
 樂小遇未代忠孝列女の名と書史小留り女の鑑と称せる命ハへてや此世の別ハ五
 せんて有合水盤の水と柄杓小汲ると又子小是を飲流石思愛死別乃涙小袖と
 漫一わが將監太刀と把て立上りなれ小秋ハ合掌して口の中ハ佛名と称ハ涙く首と
 さ一伸終小又の手小うらまると哀れなり將監ハ涙く死もハ血涙滴る女の首と
 小入るま出嘉兵太小宮と渡し時ハ小黄昏小近一早く館へ持参し冠母小見せ
 疑念と暗させよと命とくれ嘉兵太ハ將監が愛女と手小掛あが秋傷の色をも
 見せざる感敷し其心中と推量て落涙しぬ首と件の上衣小畏れ別を告て立

出館へりて彼老女對面。姫を討つ首と持參せし由と告ぐれば、老女慌ひ即時か
 嘉平太と率て北堂の丙舎へり。斯と申入るるを、照日前即ち嘉兵太を呼入
 對面し。いふ你姫を討つるを、向まらるるを、嘉兵太答て、命を従ひ痛くはひつれ
 とも人跡絶ゆる山中お終く討まひせ、御首と給りていと申衣お畏しや、首と差出
 し、照日前是と申るるを、お終の方ち、姫の上衣の血汐お染られ、心中お慌ひ、老女
 お命ぞ首と出させ、いふ、お夜陰の灯影お鮮血お冷まき、首と見て、さも妬心
 深れ、継母も底氣味あ、恐懼ま、熱も足も、眞の姫の首ありと思ひ、老女
 お回のぞく畏ませ、諸嘉兵太向ひ、命を討つ。此六如何ある寺院へり、も持
 行、葬り埋、いと一封の砂金と投与、其を葬金なり、你が奉公の義殿
 の御歸乃上、お吹舉ま、と言れ、嘉兵太唯と答、仕ま、いと社
 る、と、とて立出首と推乃て、再び將監が邸へり、對面して、貴所の御若志

お依て御臺と欺たす。何方なりとも埋葬よ、の妻おて、首と給り、此六御心
 のま、お厚く葬、懇お御跡と吊ひ、お自己ハ姫君の御供。都遠れ方、行、世
 と忍ませ、御又子再び御對面ある時、節と待、いと、言、を、將監首と
 受、りて、其功勞と謝、姫君の御更ハ御辺お任せ頼入、構て、継母の志、れ、か
 かり、お都隔、り、所、お、御艱音、なり、いと、采、新の代ハ何時、お、我、方、か、来、り
 い、と、て、砂金、畏、と、く、る、お、を、嘉兵太、押、戴、て、受、納、り、別、を、告、て、立、去、り、將、監、と、小
 菽、と、病、死、と、披、露、し、屍、と、首、と、接、合、と、言、提、寺、埋、葬、し、追、福、の、佛、妻、烟、お、管、と
 々、る、が、二人の男子ハ、主君お、従、ひ、く、他、國、行、妻、ハ、疾、死、去、り、二人の女、と、先、と、く、独、淋、し、た
 臥、房、の、中、お、枕、お、着、る、も、夢、も、結、と、寐、ら、れ、ぬ、お、来、り、方、行、末、と、思、ひ、續、れ、ぬ、去、り、年
 と、妻、お、死、別、し、今、年、ハ、未、だ、答、ある、花、よ、月、と、電、愛、せ、り、一、人、女、と、非、命、お、失、ひ、後、く
 残、る、老、の、鶴、の、腸、と、断、憂、歎、た、お、矢、猛、心、の、武、士、も、深、れ、歎、の、淚、河、北、の、堰、せ、れ、ぬ、と

有為博愛の無常と観。只顧世憂との思ひ多る。遂に老病と致し、医療小
手と尽し、更にお其効なく、疾病となり、衣の中、高枕一頼、少くもん、おたる

横佩大臣狩獵雲雀山 豊成於山中遇中將姫條

浪士松井嘉兵太々、嘉兵の悪心と善道、翻し、將監と謀と示合て、その経母と
欺たると。將監お別れ、我家へまゝ、中將姫及び妻お有、始末と語り、其妻
は、おとま中將姫も、一度お恨び、一度お歎た、自己お有、お甲斐、お死命と存生罪、おんを
身代おせ、と悲し、お斯と敷、お知、お我身、お死、おた、おとと悔
悲、おの、お多、と、嘉兵太種、練、お慰、お此、お六、お行、お時、お早、お御身、お都、お遠、お方、お御供
して、お世、お忍、おせ、おなり、御又、お大臣、お御、お政、お洛、おより、おま、おも、將監、お殿、おと、高、お議、お一、お御、お親、お子、お御、お再
會、おが、おの、おま、お針、おの、おひ、おを、おと、と、此、お少、お家、お敗、お調、お度、おと、估、お却、お夜、お中、お姫、おと、轎、お小、お乘、お嘉、お兵、お太
夫婦、お是、おを、お昇、おて、潜、お中、お小、お奈、お良、お坂、おと、ま、去、お河、お内、お路、おより、紀、お圃、おの、と、何、お國、おの、忍、おせ、進

せん、東、お西南、お北、おを、お徑、お廻、おり、お多、お小、お紀、お圃、お雲、お雀、お山、お入、お跡、お絶、おと、人の、お通、おら、お幽、お深、お乃、お地
あれ、お此、お地、おと、究、お責、おの、隠、お家、およ、と、谷、お流、お小、お沂、おり、お山、お深、おく、お入、おある、お木、お陰、お
轎、お下、お姫、お小、お餉、おを、およ、おせ、お夫婦、おも、食、おて、後、お嘉、お兵、お太、お近、お辺、おを、お走、お廻、おり、お枯、お木、お下、お枝
おと、お枝、お拾、おひ、お来、おり、お是、おと、柱、お桶、おと、茅、お萱、おを、お竹、お屋、お根、おと、葺、お二、お入、お膝、おを、お納、おる、お終、お乃
菴、おを、お結、おひ、お是、おより、妻、お六、お沢、お辺、おの、芥、おと、橘、お山、お路、おの、葉、おと、摺、おひ、お一、お時、お下、お折、おの、柴、おと、取、お時、お
洞、お間、おの、水、おと、汲、おて、姫、おを、お音、おと、夫、お里、お巷、お出、おく、お芳、お野、お糸、お熊、お野、お緒、おの、旅、お客、お小、お袖、おを
攤、おく、お錢、おを、おと、夫婦、お千、お辛、お万、お苦、おて、中、お將、お姫、おと、養、おひ、おま、おと、せ、おと、と、殊、お勝、おたり、おと、と、
噫、お痛、おの、お中、お將、お姫、お昨日、おまで、お金、お屋、お玉、お室、お小、お住、お錦、おの、帳、お続、おの、褥、お小、お起、お目、おと、と、
數、お多、おの、侍、お女、お乳、お人、お小、お敬、おひ、傳、おれ、お身、おも、今日、おお、お妨、お嫌、おれ、草、おの、菴、おの、萱、お庭、お推、おの、葉、お小
威、お拜、おの、飯、お夜、おの、食、お綴、お衣、おと、被、おり、露、おの、傘、おと、と、お小、お緊、おた、登、お夜、お称、お讃、お浄、お土、お徑、おと、と、續
編、おの、おひ、おと、る、昔、おも、と、る、例、おあり、天、お竺、お等、お乘、お國、おの、王、お法、お沙、お石、お王、おと、と、せ、お最、お愛、おの、夫、お小

死別。三才の御女あり。名を瑠璃女とせり。然小法沙王後妻の夫人を呼迎へ
 る。名を夷鳩陀夫人とせり。此夫人の腹小。一人の御女生ま。名を光耶
 女と呼ね斯。姉女瑠璃女三五の春。逆。小容貌端麗。小更世小雛。小
 く。小乃女。小達。小。又母小事。孝行深。小。東陽國の主妙莊
 嚴王とす。大國の王あり。彼瑠璃女の風姿艶麗。小賢才ある由を安。小
 小。太子の后宮小備人と。法沙王小婚。姻を求められた。継母夷鳩陀夫人。継子
 の瑠璃女。大國の太子小嫁を妬。我腹小生れ。光耶女と東陽國へ嫁せん。
 法沙王小瑠璃女の更を悪。小。遂小瑠璃女と等。乘國の北。切
 陀羅山と。遠。深。山。捨。せ。瑠璃女。継母夫人の。絶。言。ある。を。知。れ。も
 又王。小。と。言。む。継母。小。罪。小。入。更。と。厭。ひ。罪。小。身。小。罪。と。受。て。鳥。も。通。ぬ
 深山。捨。れ。山。中。の。岩。窟。小。在。く。解。脱。血。盆。經。と。妙。經。を。二。万。部。讀。誦。一。千

部書寫。見。小。七。種。の。兼。を。拾。ひ。く。燈。明。光。佛。と。供。養。一。終。小。佛。果。と。得。り。一
 と。名。緘。小。今。中。將。姫。の。御。身。の。上。も。彼。瑠。璃。女。の。難。行。苦。行。小。異。あ。り。さ。り。と。と
 斯。中。將。姫。小。憂。中。小。年。暮。て。十六。才。小。ど。ち。の。ひ。多。然。小。杖。柱。と。も。滿。心。松
 井。嘉。兵。太。一。朝。病。小。添。く。お。目。を。姫。も。妻。も。孩。小。憂。ひ。心。を。尽。と。看。病。小。れ
 人。里。離。深。山。住。を。茶。餅。を。用。む。小。使。も。た。く。只。神。佛。小。祈。誓。一。快
 復。を。願。ひ。小。定。命。小。や。其。驗。も。た。く。終。小。空。く。た。り。多。姫。も。妻。も。是。小。如。何。せ
 ん。頼。む。木。下。小。雨。の。漏。心。地。救。た。悲。も。も。死。別。の。道。小。奈。何。と。も。為。と。と。と
 泣。く。菴。の。傍。を。堀。く。埋。葬。り。石。と。建。く。標。と。中。將。姫。兵。太。が。善。授。の。為。小。と。と
 妻。小。命。と。筆。硯。紙。墨。を。求。め。せ。毎。日。淨。土。經。を。書。寫。一。又。續。經。称。名。と。其
 亡。跡。を。吊。ひ。小。多。妻。小。甲。斐。と。く。食。物。を。調。へ。小。死。拵。だ。夫。小。代。り。と。姫。と。親。ひ
 看。と。多。却。後。右。大。臣。豐。成。卿。小。播。州。の。巡。檢。終。り。十。二。月。初。旬。飯。洛。あり。朝。廷。へ。更

を奏聞し。諸館へ歸り照日前小田守中の義と向き多小中将姫ハ知音の方へ預
 置を登りし小彼密勇誘ひ出して行方あざむき多小田守將監老病小染て十
 日余り以前不瓦没ひし。虚言と実結を雜て言れ多小大臣發れ姫の姪奔
 を憤り將監の死亡悼悔れ多小月日の多小付て姫の不義乃実不口と能
 もれさむ。一朝の怒追放さむ更と後悔ありて心快くして樂くむ。余り小
 爵同せし國岳源吾が勸る小任せ氣爵と散るる多小狩獵と思源吾と
 ナらも家士勢子の者と大勢從大和路を此野彼山と持立させれれども墓
 くし獲物も無りなれ。何國の鳥獸多るる多小商議ある小一人の勢子進
 出紀伊國鶴山と禽獸沢山と言上る小依さるを鶴山へ向よとて。紀路へ
 赴た村長獵夫們を招れ集め其者多小引路者多小雲雀山へ狩入多小斯
 く猪六獵狗を放し勢子と勵して狩立多小案のてく鳥獸は沢なれ各

鷹と起し箭を放し思く小獲物して勇まれ。大臣も與小高丸臯小床机を
 立ま猪士の働れを見物あり多小遠く多小溪の間より細くと人煙の多るる多小村
 長を呼寄。彼所不人家有やと向れれ。村長谷て。當中多小古より人の住り更ハ
 いふごととトくる小より大臣怪し。弓矢携へ近習と徒村長小引路させて。煙と自當小
 山路を下り溪川づゝ。小分行り多小も多小も多小妨嫌萱の菴の中二人の女と向いて何
 う平業と為て居る多小。村長訝り。多小深山の谷間小女の栖ん多小。渠們と
 よも人間小てハいふと多小て躊躇と大臣不審あり。実も渠ハ魑魅魍魎の予と感ハ
 さんと女と化粧と覚あり。懼れ變化の所為とて。弓矢ち番て歩近づれ
 己們疾く本跡と頭ハせよ。多小か多小忍ら多小予多小矢先小けん多小と多小言さる。然引放て
 向れれ。二人の女大不發丸中多小四十ありの女菴より走出て地上小平伏先逃す
 もふ不吾徒ハ妖怪變化の者ハ。世と悼る更のいひく。多小深溪小憂日月を

送る者小ていし謝るを大臣猶も咎めしが世を悼る者多し。女小除く人跡絶る山中任るや。八察さる小此豊成を結るきんめ女を化粧小相違有べし。いでく目小物見せんとらと満月のてり結。あや切て放さんせれる所小今一人小女先暫く待せり身上と隠さしやまむと声なけり走り出先女小立塞りて半しる小大臣此女の体とさしるる小髪小荆棘のてり乱し者る衣も垢深汚とこれも其面雪のてり。面貌描るがこれ美奈小。然も面影亡命せしは我姫の面小彷彿これ猶も腫を定てんる小おし女も大臣の顔とあや同もせむとすまのり君小又上おて公在るも。吾身と中將姫がある果おていとトされたる小大臣も少被れらるる。思ひ入。是妖怪の予と結りさんと仮小我女乃容貌小変化しあんと疑ひ再び声を励し。你予と惑はさん。我女の次女小化粧も争り惑はさるる。予女。陋き者と密通し。其者小誘れり。姫奔せりと。此小何

ど此深山小有る疾本相を顕さしとて再び矢ち番て責られし。姫と潜出と涙を流し。吾身ハ露やもさる汚る行跡ハ。を。何ある人乃逸言小。今の母公松井嘉兵太と。さる者。中將姫義親王家ハ内有る。小定。小賤た者と不義これ。天聴の心さ。討て捨よと。大臣の命さ。你何國小ておも付よ。吾身を嘉兵太。小。嘉兵太吾身をおる山中。將行。経母公のやの。一條。言せ。己小斬んと。太刀を拔持ひ。小吾身が脚経と續い。て。俄小善心。將監と心合。小教を身付。小吾躬と助け。母公の。を。悼。夫婦とも小吾躬を此山。伴。父上脚帰。洛在。小。街怒と。省吾躬と。帰。参。させ。と。世小情深。夫婦辛苦と。凌。五躬と。音。小。其。嘉平太。人。死去。是。ある。兵太の妻二人の手。小。今日。も。露の命と。緊。な。る。小。只。今。不。思。儀。小。又。君。小。愧。死。姿。小。て。見。小。脚。佛の。脚。手の。糸。と。と。曳。合。せ。の。よ。と。小。難。有。も。嬉。し。も。ある。小



豊成山ノ再會

二



豊成山ノ再會

三

豊成山ノ再會
 雲雀山ノ再會
 再會

猶化粧の者も疑ひのひて。御矢先くけむらんといふ力なり。他人の手小く正いんより
又君の御矢の下小命と失ひもあらんことを本意の素り無常露の憂世小頼め
命と存命をぞんより疾く弥陀の御國へ赤り。実の母公小見へやりくひのぞく一箭
小遊せうと。矢先小坐して掌と命をむ。兵太が妻周障て姫と圍ひ。妾が命と召ま
姫君と助けぬと言ふも。姫も押すて只吾身と射ぬと。互小身と惜まど死と争と
んく。大臣との妖怪あまると悟り。弓矢をうると。投捨借ハ真の我姫なり。うらうは
と夢小あわらざるうと。まり寄て姫と擁抱れ。喜涙ふれぬ。近習の士村長
們も。奇異の思ひかたき。扣居り。大臣ハ姫の手と採て菴の中へ伴ひ入嘆息く。慚
愧の額と撫。噫予愚小と後妻の奸計小欺れ。你と実小不義者と思ひ。一旦の怒
小とくと実小もれ。館を追もよと命。朝廷の役義黙上ぐ。其を置へ
下。飯洛の上。你的義と向小彼密男小。秀れ。亡命と行方と。ととと。是と

も偽言と。とと。你在恨。面目無き。然小不斗。今日此山中。小く還り會。偏
小氏神春日明神の導。せの所。人。是。示。就。ても。只。悪。む。ぞ。れ。ハ。後。妻。乃。妬。心。なり
ま。返。と。く。賞。と。ぞ。れ。ハ。嘉。兵。太。が。活。命。の。情。ひ。り。存。命。せ。重。賞。録。と。あ。く
姫が命の思小。酬。め。れ。小。早。く。死。去。せ。と。そ。殘。心。な。れ。飯。洛。の。上。厚。く。佛。更。作。善。を
言。む。ぞ。と。と。其。妻。小。此。年。月。の。父。抱。の。勞。と。深。く。謝。り。の。以。諸。姫。と。嘉。兵。太。の。妻。を
將。狩。場。の。陣。所。へ。飯。り。國。岳。源。吾。と。召。て。中。將。姫。の。此。山。中。小。忍。居。の。以。始。終。を
玲。り。予。今。百。當。山。小。狩。獵。と。姫。小。還。り。會。ハ。麒麟。を。狩。獲。も。勝。り。大
獲。物。な。れ。今。ハ。狩。獵。も。是。と。た。り。勢。と。班。め。帰。館。を。促。し。と。命。せ。れ。ぬ。を
源。吾。領。掌。の。諸。士。へ。君。命。と。傳。へ。勢。と。班。め。帰。館。の。准。備。と。な。り。時。小。中。將。姫
又。大。臣。小。向。ひ。吾。身。事。不。斗。又。君。小。還。會。も。身。の。嬉。し。さ。喻。は。く。ま。く。人。と。も
吾。身。館。へ。歸。り。を。ぞ。む。今。の。母。公。御。身。と。愧。ひ。館。を。辭。して。御。里。へ。歸。り。ま。り

登んさあつてハ吾身のハ脚離縁をせよるハ當リハ孝の罪のんがく侍る也
依て吾身ハ何なる御事かとも預け尼法師ともあ給りハ世ある今公
も脚離別不及吾身と悪むハ御心もわらぬハ願ひハ大臣を召て你
のハ理の至極なり予後妻の妬心を除くと跡も果んども今離縁不及と彼
愈你と恨むも何なる善心を護さん計りしとて你を尼法師かせん更を
思ひよぬ義なり心を守る更多き你ハ須臾別荘に任せ今般還會一更皆
く後妻不語るまもれハ双方無難多くと仰も小姫よハ心と安んぬけ
る是ハ依て大臣家士とも末の下部まで中將姫の飯食の義と固く引外と
つとと緘り止められ姫と兵太が妻と用意の乗輿小乗ハ國岳源を添て別荘
ハ送ら且大臣緒志か子の者ハ狩得る鳥獸を差擔せ狩獵より帰陣せ体
小もわく館へて飯られ斯て後大臣ハ別荘ハ妻の女房と遣て姫の傳と

嘉兵太妻と松枝と叫ぶ。衣服調度をきく。与一厨頭をせられ。松枝大の
始ハ厚く思と謝し。さも申さく氷と砕れ雪とて持た暮し辛苦の
今ハ昔結とわり。栄花の時ハ遇ハ愈中將姫と大切ハ守傳ハ忠勤を抽て
然ハ北堂照日前ハ中將姫の無更ハ飯奉有ハ義を敷ハあも。嘉兵太ハ半ハ
討さのハ一の思居られも。推りてわく右大臣殿鶴山ハ姫ハ再會ハ
連帰ハ別荘ハ傳ハ任せらる。風流とるハ大ハ孩ハ兼ての巧ハ画能
とかり大臣の思ハハ程も後同く。館ハ在ハ針の席ハ坐する心地せられ病ハ托
けハ親里帰れも。猶も嫉妬の劫火ハ焦。中將姫の存命ハ妬ハ毒ハ
氣病ハ殺して病ハせられ。緘ハ女の執者ハう。浅猿ハ者ハハハハハ

中將姫於當府寺得道 感得蓮曼荼羅條
右大臣豐成卿ハ北堂疾病ハ依て親里帰られも。幸ハハ。姫ハ館ハ迎ハハ

のひら。此時幸ひ己改りて姫十才おかりのり。諸大臣姫と松枝の物語て國
 岳將監の女小殺が姫の身分たかりて死するまで中大夫の感哀哀と平城乃
 東大寺お於て大法吏を執行ひ小殺と嘉兵太の靈と祭り。厚く七跡と口巾を
 ぐり。時小朝廷小稱徳天皇山明御在り。光仁天皇天下と知君他戸親王と太子小
 立のり。曆号も寶龜と改元さるる。諸も中將姫六八の春と過りて容貌
 倍艶麗く。譬を金谷千樹の花。瑤池玉樓の月ともいふ。も嬪西施も
 面を愧李夫人楊貴妃も顔を失ふ。許なれど其さえ天聽小達り。春宮の后
 妃も備らるる。内く其脚沙汰有る。豊成卿大不悦喜あり。年來の宿望
 成就さる。時節近著たり。中將姫の其義を言さる。勅詔の下をも心待
 小ぞ待さる。姫はしる。思ひのひら。音身継母公の絶言おて疾斬る。むる。小
 嘉兵太を情小て不測小命と助けられ。偏小脚佛の救せのひら。傳歩大

思教主の如来も上かれ。采茶の王位を捨り。宮中と潜出。擅特雪山小入る。捨
 身の行を。無上正覺の道と得り。ひら。おのり。王宮攝館も皆火宅の極小
 て。女脚白妃も只夢の富貴なり。それより佛道を修行し。此苦界と厭離。安
 難淨土。往生ん。無究竟樂。ある。兼て。當麻寺。只禪林寺とす。す
 尊れ。佛公の道場。雙たれ。殊勝の地なり。と。吾身彼脚寺へ。心静。道と
 修行。脚佛小仕さる。ん。あ。二八の。盛。身。一向無常と觀。ひ。松
 枝の。其上。結り。皮。せ。と。小館を。潜。出。人。と。安。小。准。備。と。な。り。ひ。脚。又。大。臣。小。金。所
 ち。今。生。の。脚。を。拜。あ。ん。と。平。日。より。も。一。際。花。か。小。化。粧。し。装。束。も。花。麗。の。綾。羅
 錦。綉。と。着。の。ひ。ら。其。さ。暁。小。綻。ひ。初。花。より。も。艶。小。て。將。小。天。津。乙。女。の。下。界。之。降
 一。と。疑。れ。更。小。人。界。の。人。と。思。れ。ぬ。許。かり。中。將。姫。徐。小。殿。中。と。往。復。て。入。ら。り。の。小
 是。八。七。母。公。の。脚。紀。念。の。玉。攝。寄。彼。又。君。の。脚。清。玩。の。歌。扇。風。と。見。ま。す。も。今。更。餘。波

惜しん欄干小侍とあひあむ。菊の籬蘭の臺幼稚多し。其昔枝を攀茶と
 摘し更すと思ひ出され非情草木まき。今且限と思ひて不覚の涙お徒を
 流しぬ。斯く御又大臣の前へりゆひ。二三御物語ある中、中将姫覚を
 ろしと涙とぞわしゆひ。大臣不審あり。你は何ぞ涙涙とぞと問はる。お
 姫とぞ思ひ氣とぞ。整へて只今又上の御負を見まほし。御幸御玉
 ひ大内の御勤仕小芳の御負も老させむを思ふ。不覚涙のそれ
 をふるなりと言はれぬ。大臣、姫の心中と知む。其孝心深た釘を感せられ
 昔伯命と細入を老む母お答ふ。時其答杖の力乃兼し。成悲心と泣
 とぞ。今你が子の老とぞ致も。は孝心なり。されん。と老む者なり。只子
 ろ者其身と慎し。立身出世して。親へての言と揚る。孝行の弟。は
 とぞ仰る。姫は此言とぞ。心中の吾身館を潜出當麻寺へ入る。尼とたり

とぞ。おひ。とぞ。怒も歎もまゝ。入る。胎までせらる。涙を強て抑。其より何と
 あれ物語ありて。御前と退れ。佛回へ。故母公の靈位と拜し。浄土経を讀
 誦し。御ゆるむ。右其夜人定。後松枝を先小立て。密小館の後門より
 潜出當麻を。素り。典乗轎も。履も。草履と。まゝ
 松枝一人を便む。燈も。あれ。夜の路をた。歩。程。足も。草履。おれ
 傷。血流。路上の。叶葉。浴。且。休。且。歩。幾千の。辛苦。忍。行程。七里の。道
 幸。夜の。明方。當麻。割。着。松枝。小。葉。内。僧。房。入。剃。髪。乃。義
 を。頼。小。任。僧。中。將。姫。の。客。顔。と。は。く。と。人。て。中。々。御。出家。の。御。望。殊。勝。の
 御。更。お。御。年。若。殊。更。お。と。あれ。御。方。と。入。え。せ。の。を。怪。御。髪。と
 剃。ま。い。せ。ん。更。後。日。御。答。も。悼。り。あれ。を。只。思。召。止。り。あ。と。練。多。れ。を。姫。押。入。吾。身
 と。さ。か。の。貴。家。の。者。お。て。い。は。れ。賤。れ。市。人。の。女。お。て。い。か。幼。き。と。り。又。母。お。後。れ。姨

御前の艱言いづせん かつらつ成いささ長なともすは其その姨あはむせ御み前まへもも頃ころ日ひ世よとまのの頼たのむま方かたあは身みあはを
 世よと厭ひいと思おもひを折をちき。是こゝたも人ひともも夫むこ後ごれを親おや屬しやくもも離はなれを尼あま法はふ師しとも姿すがたと
 うかとやとやさらるる小こ連れん音おん身みもも御み佛ぶつ小こ仕しまりくく。御み寺てらとも頼たのまりせん
 とも遠とほくくとも步あゆ連れん糸いとなりなり何なに卒そつ望ぼうとも叶かなふふ。兩ふた人にんもも御み弟てい子こ小こなりてて給たまふふと
 又また余よ義ぎももたくのの由よしいれ。住ぢゆう僧そうもも其その志しのの変へんともあはれを人ひととも左さ程ほどをを思おも
 ともあはれを徒てい弟てい小こなり進ますす。然しかもも髮かみをを剃ありを義ぎハハ剃ありを延のびを先ま
 三さん飯い五ご戒がいをを授あづけを給たまふふ。是こゝとも授あづけを借かりを多おほくく男おんな僧そうもものの寺てら中ちゆう小こ女にょ性じやうを
 置おかりのの子こんん。人ひとのの疑ぎ惑ごくをを生なじを理り小こいを。寺てらのの傍かた小こ住ぢゆう乃なり自みづかのの彼か方かた小こ居ゐ
 ひく僧そう法はふをを習あひをとも。口くち前ぜんのの刀やいば自みづかのの家いへ小こ二に人にんをを留とどめを住すめをらる。却かへ鏡かがみ横よこ佩ひの
 館たて小こ中ちゆう將しやう姫ひめ館たて小こ居ゐともとも侍う女にょ們ら發はつ死し感かんひをれを。大おほ臣しんもも大おほ小こ發はつれを其その
 勢いき乃なり人ひと步あゆとも公こう分ぶんてて遠とほ近ぢきんとも尋たづねをせを。捨すて身み有ありを更またももともとも。河か川がわ河かを

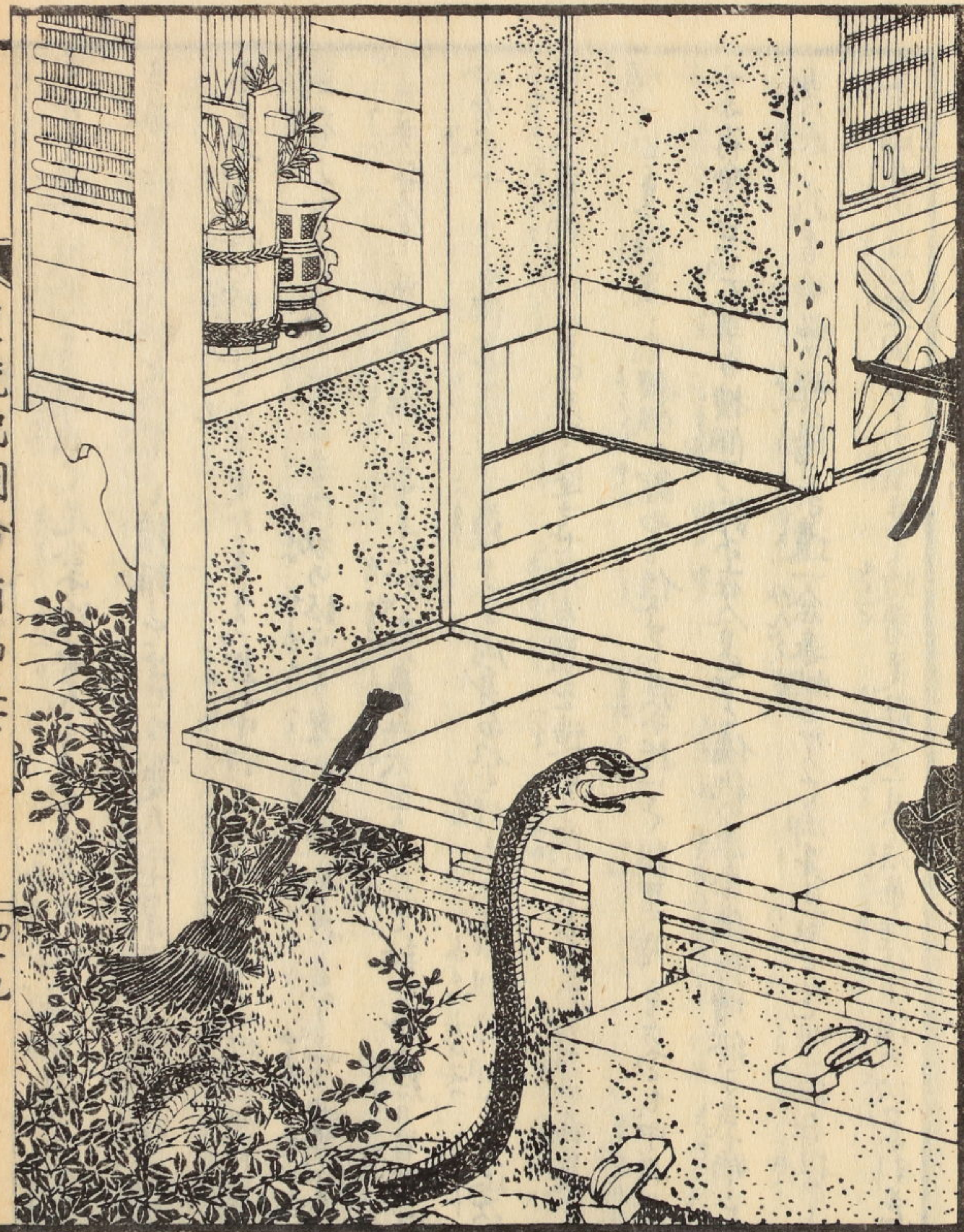
入い山さん林りんハハ草くさとも分ぶんてて尋たづねをせをらる。更またもも其その御み行ゆ方かたまれれを。侍う女にょ女にょ童どうもも泣なき
 非ひ悲ひむむとも列れつのの更またあり。大おほ臣しんもも夢ゆめもも夢ゆめとも如ごとくく御み敷しきすす。方かた陰かげ陽やう頭かぶ小こ除ぞ
 トと各おののの御み命いのちハハ別べつ条じょう在ありを。兩ふた日にちの中ちゆう小こ御み在ありを所ところ相あいを知しらる。とも口くち前ぜんのの趣おもむ
 をを言い上あるを。大おほ臣しん少すく少すくハハ心こゝろをを安やすんで。猶なほ人ひとをを分ぶんてて緒いと方かた尋たづねをせをらる。小こ
 國くに岳たけ六む郎らう之の歸かへりを。姫ひめ君きみ六む郎らう松まつ枝えだとも石いし連れん當たう麻ま寺てら入いりを。寺てら僧そうのの徒てい弟てい小こなりののい
 由よしいれとも言い上あるを。小ことも大おほ臣しん中ちゆうののいを。借かりを先ま日ひ何なにともかを。死し物もの結むすの中ちゆう小こ姫ひめがが落お涙なみだせ
 今いま生なまのの意い辞ひらのの意いふをてて有ありを。其その時ときとも知しらる。練れん當たう麻ま寺てらとも後ご悔くわい
 急いそ死し乘り典てんをを以もつてて迎むかへを。六む郎らう小こ女にょのの人ひと步あゆとも添そ當たう麻ま寺てらとも向むかへをれ
 六む郎らう君きみ命いのちとも領りやう掌しやう。乘り典てんをを昇あげを。當たう麻ま寺てらへへ馳せ到いたりを。寺てら僧そう小こ子こ細こを
 向むかへを。口くち前ぜんのの刀やいば自みづかのの家いへへへ往ゆきを。姫ひめ小こ對たい面めん。大おほ臣しんのの御み愁しゆう傷やうとも噴ふきを。心こゝろ死し御み飯い館たてかを
 ののともややならるる。小こ姫ひめハハ剃ありを。髮かみハハ仕しめをらる。長ながかを。翠すい翠すいのの髮かみとも半はんハハ敷しき捨すて松まつ枝えだとも俱とも

一向念佛續經行ひまゝて在りたる。六郎が言とよめてひて曰く。吾身こと
 疾亡るる命も御佛の御加護あり命と助り雲雀山へ入らう。己心八尼法
 師の姿と換へんと思定らう。然し又君の還會あり。且館へ歸るといふも。富貴
 栄花も望まなく。只御佛お仕まつらう。不孝な似れども。此御寺へ来り己心戒律と
 授り。斯敷尼と成らう。今夫の後婦人の
 疾死したる者と思断のひく。吾身お出家を遂せよと又君の言よとく
 敢て承引む。六郎承りて猶種く幻を賜て練々も固く歸るまると誓言と
 えて仰る。六郎力なく空轎を昇りて館へ歸り。至君へ右の由言上り。大
 臣は斯てハ叶はんとて再び源吾を遣へて歸館を勧めさせよと。中將姫初
 のく言のひく承りて。此上猶も御使と給はる。君お伏せたりと仰る。小豆
 源吾もとておす。是もとてと歸り。斯と言上りたる。大臣は執熱と思ひ

々々元予が女初瀬寺の觀世音の授けのひ子おれを佛乘の縁あり。されど一度
 継母の讒言あり。嘉兵太の手お討らる。不測の命と助る。ハ觀世音の御利益
 あり。嘉兵太が善心と護せり。還賊飯慈心の經文空しくする所たり。予鶴山小
 狩りも思ひ觀音の御導あり。抑予が姫二方中と女人成佛の歌と縁。十才
 中と浄土經を續習ひ其より一日も續編を怠らざり。都ての行任坐卧尋常乃て
 女お似る。是凡人のあまも。佛菩薩の仮の予妻の腹お純生り。ゆるる。然し予
 肉眼凡夫にて是と悟む。只愛著の鮮引きて。内におく。家门の榮と針とせ。八欲の
 私なり。彼悉達太子も善慧菩薩の再誕にて。出塵の望と在り。多く。御父浄飯
 王是を止んと。百般防禦とたり。悉達太子も。衛護嚴重ある宮中と道
 に出く。檀持山入りのひと。考れを。日。姫も又遂に出家とせ。佛因にて。何れと
 制し。其道心と斷たさる。今其望お任せ。出家と遂き。も。小如。す。進

其後ハ迎ひの義を止り改めて國岳源吾を使者と當麻寺遣はれて寺僧
 小姫の守衛の義を能く命ぜられ當麻寺の傍乃山小草菴と号し建之姫と松
 枝を住し寺領の菜地を寄附し其菴室を紫雲菴と号し今猶本
 堂の傍小跡遺まら當麻の護念院是なり斯て中将姫十八才なり其年の
 六月十五日寺僧実雅とる知識改めて戒師となす法式嚴重小整共衆僧を本
 堂集て經を誦し花を散し中将姫を中央の儲の座に請じ緑の髪を剃落し進
 世法名を善心比丘尼と号し其後佛法如と改めし世の令中将禪尼と稱す
 其次小松枝を剃髪せし松栄尼と号し其日右大臣豊成卿も参詣あり中
 將姫のすも艶やうある黒髪を剃落を乞ふ流石思愛の親心小思ひかや在
 ら敷行の落涙小衣紋の袖を漫まらる僧戒師と先づ衆僧又種々の妙經
 を續編し法戒殘る所を畢れ右大臣殿より衆僧(布絶)引き方又て饗

膳の管侍として大臣飯京せられ多の中將尼公望のどく出家得道今人心の
 る雲もた浮世の纏縛を遁き松栄尼を法友と朝夕後世の管とて行ひ
 と多て在りたる小松栄尼其年の冬後初の疾ふ津て亦臥る漸次重りて
 終小命終り善心尼公深く歎死悔しむ亡骸を厚く葬り跡懇小吊ひ
 たり然る小尼公の菴室の庭の藁より長五尺許の大蛇這出眼を瞑し口を
 開れ舌を肉く小尼公と睨し席上這上るとる小蛇小尼公槍をささぐ座を去か
 ず草木國土赤心皆成佛とて小蛇とも成佛の縁なりとも傳世昔
 吞舟の大海一度称名の声をきき慈悲心起り死して羅漢の生れとかや増す
 尊尼御経をばむ湿患の因を去成佛の果を得ん更疑ひ有らざると蛇向ひ南
 無皈依佛皈依法皈依僧と三皈を授け法華經の提婆品を續編し其の
 志とあす蛇も妙経をばむ心きき其より引返して叢へ這入るが是より此蛇時と



中將姫

徳母命作と稱
 悪念生一頭の
 毒蛇とて蛇
 道徳を以て
 果てぬ

もわく此所彼所より這出く。尼公近着んとされども。尼公蛇小佛果を得ん出
 る毎小法華経八油を取替く續編してせせり。更九三十七日及ひく。其後八何
 あるも。や。件くだんの蛇絶へびたぎて出る更あらたなり。然中しか特とく尼公にこう或夜あるやの夢ゆめ小彼この継母ついで照目あきめの
 前まへ在あり。か。の姿すがたあて現あらま。妻つま伎ぎ初はつの姫ひめ心こころ厚あつた。脚身あしと悪わるく。山下やま遠内とほうち小命いのち
 として失うしなせん。或ある草くさの餌え小毒どく葉はと加くわ。或ある嘉兵かへい太たをう。ひて封ふうせん。練ねり。百般ばんぱん小
 心を尽つくせり。佛ぶつ菩薩ぼさつの守護しゆごあり。脚身あしあら。奸いさやみ巧たくま皆みな齟齬そご却かへく。小遠次とほぢ
 豊とよ丸まる小我わが們ら小非ひ業ごうの死しと遂つひさせ。所有しよいう罪つみを造つくる。猶なほく。ま。脚身あしの無な更あら小
 帰かへり。更さらの腹はら黒くろく。横佩よこたけの館たねも任まかせ。疾はや小托たくけ。親里おやぢ帰かへり。中ちゆう将しやう姫ひめ
 世よ小存ぞん命めいと。百ひゃく羊じやうの横佩よこたけ乃すなは館たね在あり。偏へん執しやくの惡あく念ねん猶なほ弥み增ぞう。終まく。氣き病びやうと
 身みハ死し。れ。も。嫉妬しやくとの魂たま小陽やう土つちの遺い。念ねん毒どく蛇へびと。かり。脚身あし小冠かんせん。此この日ひ頃ころ付つ担たんひ
 る。脚身あしの道みち心こころ堅固けんこあり。壓おさまで。近ちか着かく更さら能あたく。具ぐ法華ほふわ経きやう續編じゆくへんの功こうカカ引ひき

一念ねん發はつ起きて罪科つみかも滅めつひ。成佛ぶつじやう得とく脱だつする。更さらと得とくる。是これ去さり。あ。脚身あし乃すなは信心しんの
 余德よとく小よれ。南無なむ中ちゆう将しやう禪ぜん尼に大だい知ち識しと。祢ね合がう掌しやう礼らい拜はい。忽たちち。身みより光明くわうめいと。放はなち
 紫雲しゆん小乘じやうて。西さい天てん私し去さと。足あて。夢ゆめハ。覚さめる。尼公にこう隨喜ずいきの涙なみだを流ながして。西方さいほうと。礼らい拜はい
 一いつの。其その日ひより。衆僧しゆじやうを集あつめて。七しち日にち間かん大だい浴よく更さらを。執しやく行ぎやうれ。継母ついで照日あきひ前まへの靈位れいゐを
 先まへと。豊とよ丸まる小遠次とほぢ小我わが將しやう監かん。嘉兵かへい太た夫婦ふうふ等らうの靈位れいゐを。祭まつり。其その言ごん提だいを。を
 吊たひ。ひ。ひ。諸しよ又また右みぎ大臣だいじん豊成とよなり卿きやうハ。世よ嗣しの男子なんし在あり。も。脚家あしより。養子やしやうと。迎むかへ。て。世
 嗣しと。せ。れ。多おほく。是これハ。藤原ふじはらの。結むす繩なはと。や。せ。り。後ご羊じやう與よ剛ごうの。夷い賊せき征せい代だいの時とき。拔ひ群ぐん乃
 軍功ぐんこうを。ま。り。ハ。此この人ひとなり。是これハ。具ぐ豊成とよなり卿きやうハ。中ちゆう将しやう尼公にこうの。十八じゅうはち之しの。冬ふゆ。十二じふに月げつ。小老
 病びやうき。一いつ發はつて。薨こう去さあり。了りやう。壽じゆう六む十三じふさん才さいと。を。安やすす。中ちゆう将しやう尼公にこう大だい小脚あし愁しゆう傷やうあり。く
 種しゆの。追お福ふくと。修しゆり。中ちゆう陰いんの。向むか表へい小菴さう菴さう。父ふ君きみの。願ねん生せい善ぜん提だいの。為ため。且かつ八はち冥めい母ぼ継母
 佛果ぶつぐわの。為ため。小稱せう讚さん淨土じやうど經きやう一いつ千せん卷くわん書しよ寫しやうの。大願だいがんを。起おこす。一いつ日にち。昼ひる夜よ寢ね食じきと。を。し。れ

傍の土を堀穿つふ忽ち井となりて清水湧出。老尼緑油一藕絲と其井の水
 小く深まる水は清く澄る糸は染る小従ひ五色小深リると思縁也
 斯て深まる糸と井の側なる櫻樹の枝より乾り。後世其井と深井と
 号し櫻と糸掛櫻と号す。其後七月十日の黄氏貞頃廿四五人の容貌端麗丸
 女人何國よりともあざと出来りて老尼小向ひ藕糸と調ひやと問老尼答
 て己小調ひよりと言ふれども今夜乃申小織立ひ分ると。何時小持来久
 機の具と採来りて。本堂の乾の隅小機を立藕糸を空捲して。指葉三把小
 香油三升を灌で燈を。頓く機を織りて其手逸れ更譬へり
 機杼の音輒く絶てて絶間なく。子丑寅三時の間小九尺四方の間小一丈五尺
 の大曼茶羅を織終り。曉小及びひれを機を織り女庭へ立出何所小有ん
 一丈五尺の間小節を折行て一夜作とも切て持来り。それを軸とあて巻収え

二人の尼小渡して何國ともまらず出去々々中持禪尼奇異の思ひを。更小不審
 晴むる時小老尼右の曼茶羅を本堂の正面小掛く礼拜し中持尼小由拜まり
 々々小。尼公拜見し。小五彩の色鮮明小。佛像及び宮殿樓閣人物草木鳥
 獸小至るまで。微細なる更意も言も及れど。只あつとむる感嘆もひれ。老尼
 尼公小向ひ指示して曰。曼茶羅と号して極樂の变相なり。先中央を極樂
 浄土の依報正報地上地下虚空無數の莊嚴乃体相を織頭せり。次小外縁の三
 段ハ右ハ拜む者。左ハ觀経の序文小説所の如く。佛在世の昔提婆達多佛法と妨ん。阿闍
 世太子と惑し。父頻婆娑安雅王を七重の牢獄小禁め。母の章提希夫人在奥深れ
 座席窄小困篋置し。小章提希夫人一心小親迦如来と念し。々々小。世尊其窄乃前
 小出現。枚のむひ義を圖し。是と禁父禁母五縁の圖と縋り。又左ハ拜む者。觀
 経小説とるの日相觀水相觀より普觀雜想觀ま。定善の十三觀乃体相を織頭し

次下縁ハ極樂浄土の上品上生より下品下生小のまで九品浄土に往生する
の体相を織りたる。遂に指教て相傳し。其后老尼より曼荼羅を
三度礼拜し偈を唱へ曰

往昔迦葉說法處

佛事新起又有故

感君懇志我未此

一至此場永離苦

是のうら唱終り尼公小向ハ大曼荼羅已成就し。御身の大願も満足すと
今ハ我も歸るると有る。尼公其袂をひき留り奇特を示し。吾身の願を
叶させし。御身ハ何なる御方にて在と云ふ。又先ハ機を織りし。女性ハ何人にて
と問ふ。老尼忽ち端嚴微妙の佛身と變りし。正坐して御身より光明放
ち。其ハ予ハ是西ガ浄土の教主阿弥陀佛なり。先ハ曼荼羅を織りし。予ガ左の脇士
觀音菩薩なりと示し。御手と以り中將尼の頂を摩りし。善哉。你勉哉。今

より十二年の後予必とて迎て極樂浄土より再會すと云ふ。妙音高き宜
く座を立ちて。忽ちて虚空ハ音樂響り。天花降り。異香芬郁と薫り
光明四邊を照し。紫雲より。中ハ如來ハ即ち浄雲に乗て西の天に去
り。二上ガ歡のありし。御姿幽ふ。をせし。これより。成り。成り
中將尼公ハ此可持とて。御後ハ伏拜し。隨喜の涙袖に餘り。渴仰の思胸に
満今も生身の阿弥陀如來と拜し。且藕糸の曼荼羅を。感得ありて。如來直の
御相傳を受。曼荼羅の變相定散二善の廢立。浄土往生の安心起行。殘る所なく
會得し。歡喜踊躍ありて。大曼荼羅を本堂に掛く。御後弟及ハ一山の衆僧ハ
拜し。尼公ハ曼荼羅の前にて。昼夜六時の礼懺怠り。更ハ抑入皇三代欽明
天皇の御宇。初て吾朝ハ佛法渡り。以来世人皆極樂浄土の体相。只耳おぼし
み。拜見する。曼荼羅ハ。今般中將尼深信堅固の徳に依て。弥陀觀音來

現げんもあ安樂國土あんらくこくどのしやうん莊嚴しやうげん微妙びまう此こゝ曼荼羅まんたろ小織せうぢ著ありてゆかん肉眼げんごのふた凡夫ぼんぷもり目前まへ
 小浄王せうじやう微妙びまうのしやうげん莊嚴しやうげんをおがげて拜まがふ極樂極樂ごくらく往生じやうじやうのせう便べんと得るま更ま誠まこと念ねん佛ぶつ曼まん尊そんのじ時じ節せつ到たう
 未まと緇つを去さ程ほど中ちゆう將しやう禪ぜん居い藕お絲しのまんたろ曼まん荼た羅らをかん得とくるいのま更ま世せ小せう隱いんなく
 上かみ王わう候こう貴き人にんよりしやう下げ万まん民みんふいるやてまんたろ曼まん荼た羅らとまがまて拜まがふ我もくと糸緒いととる更ま蟻あの
 群ぐんるが如ごとく當麻ま寺じのせん曼まん尊そん言ごんんは斯かく中ちゆう將しやう居い公こう弥や信しん心しん堅けん固こ行ぎやう以い清せいの
 光くわう仁にん天てん應えい元げん年ねん辛しん酉う三さん月げつ甲が子し日にち買か買か自じ身しん終しゆう焉えんのき期きと知るい洗せん浴よくて身と浄め
 盥うゑんひ嗽たる西さい向かう以い端たん坐ざ合がう掌しやうて續経きやう往じやう生じやうのじ時じ刻こくをまち待まちりいるる遂すい小せう午ご尅こく
 聊りやうのぢ疾ぢもなく露るるのしやう脚けつ惱なうもなくて只ただ眠ねんるる大だい往じやう生じやうと遂るるのしやう脚けつ年ねん二十
 九く女にょふけきさのひなる其其その脚けつ臨りん終しゆうのき砌せき虚きよ空くう不ふ音おん樂らく空くうえ名香かう草そう薰くん紫し雲うんふ引
 引ひく聖衆しやう衆しやう来らい降かうして安養やう浄じやう土どへ引接せつるま奇き瑞ずい現げんるる誠まこと小せう女にょ僧そうふ於て
 扶桑皇統記前編卷之五十五
 貞てい亨かう未み曾そう有ゆうのだい道どう心しんとハ此こゝ凡ぼん公こう也なり



ゆゑに
 小車
 松を
 中
 せん

享和三癸亥新刻
 文化十四丁丑再刻
 嘉永五壬子三刻

愛知縣名古屋大曾根
 矢野平兵衛

